

おしゃべりコーナー

(目次)

< 今月の歌 >

「[イマジン](#)」

(竹の台・タイガー)

< ショート・ショート >

「[赤い傍線](#)」

(春日台・大西 No.14)

< 西神の花 >

「[ムクゲ](#)」

(竹の台・島田 No.2)

< 今月の歌 >

『イマジン』 唄：加藤登紀子、作詞・作曲：ジョン・レノン、オノ・ヨーコ

<https://youtu.be/d3JYQBtlHxo?si=LHlLkLNYFBgJ8Yt1>

日経新聞の「カバーストーリー」9/29号を読んで、改めて、「イマジン」の深い歌詞をかみしめました。

加藤登紀子、オノ・ヨーコと「イマジン」の約束 里帰りハルビン公演

デビュー60周年を迎えた加藤登紀子が、今夏、故郷の中国ハルビンでコンサートを開催した。戦後80年の節目に実現したコンサートに込めた思い、「イマジン」を歌う理由を聞いた。



「私の街と呼ぶことを許してくれますか」。ハルビン(中国黒竜江省)でのコンサート終盤、加藤登紀子は1100人の観客を前に、故郷を思って作った曲「遠い祖国」を披露。大きな拍手を浴びた。演奏は地元のハルビン交響楽団が担当し、歌詞は電光掲示板に中国語で表示。ステージでは「歌手になったから、ここに帰ってこられた」と万感の思いも語った。

加藤は1943年に旧満州のハルビンで生まれ、戦後、2歳8カ月で日本に引き揚げた。南満州鉄道に勤務し、歌手を志したこともある父・幸四郎は、かつてハルビン交響楽団の支援に奔走した一人だった。

2018年冬、加藤は75歳の誕生日をハルビンで過ごした。その際、コンサート会場を下見するなど「いつかハルビンで、父が愛した地元オーケストラと共演したい」という思いが胸にあったという。だが、のちに起きた新型コロナウイルス禍で構想は立ち消えに。7年後の戦後80年という節目で実現したのは、加藤が背負う宿命めいたものを感じずにはいられない。

60年の歌手生活において、中国でコンサートを行うのは実は2度目。初回は81年、日中国交正常化後に文化交流の機運が高まったときだった。その前年末には世界を震撼(しんかん)させる事件があった。ジョン・レノンの暗

殺だ。この一報に触れた加藤は衝撃を受け、直後に日本で行った自身のコンサートで、追悼の意を込めて急きょ「イマジン」を歌った。

その後、面識のなかったオノ・ヨーコに手紙を送っている。「平和を約束するために中国に行くという決意と、ヨーコさんに平和について発信してほしいと書きました」。まだジョンが亡くなって間もなかった。「当時のヨーコさんは誰にも会わないと言われていて、手紙が殺到していたそうです。私が宛名を毛筆で書いたからか目を留めて読んでくれた。奇跡的ですよ」

中国公演が終わる頃、ヨーコから「ニューヨークへいらっしゃい」と連絡があり、北京から成田へ着いたその足で米国に飛んだ。ヨーコは「刑務所にいる人と結婚した人」として加藤を認識していたのだという。加藤の夫・藤本敏夫は学生運動の活動家で、獄中結婚をした。

「ヨーコさんは、私の夫の活動について『壁を壊そうとしたのね。でも、それはとても難しいことで多くの人が挫折してきた。ジョンと私は壁を壊すのではなく、人の心の窓を開けることができる。私たちは、想像力を使って心を開放することができるはず。それがイマジンという歌の真意なんですよ』とおっしゃいました」。

今回の公演では、その「イマジン」も歌った。英語の後に自ら日本語訳を朗読し、加藤と手をつないだ中国女性による中国語の逐次通訳も加わった。この演出は、加藤のこだわりだ。「世界は一つになれる」という思いがこもった「イマジン」を3カ国語で届けたのは、ヨーコへの手紙に書いた平和への決意が時を経ても揺らがない証し、そして観客の心の窓を開ける仕掛けでもあったのだろう。

代表曲の「百万本のバラ」、中国でも人気の「紅の豚」エンディング曲「時には昔の話を」なども披露。観客には「知床旅情」のレコードを持ち、日本語で朗々と歌い上げる20代のファングループもいて驚いた。

デビュー60周年、81歳を迎えた
「日本が今、戦争に向かわないためにメッセージを残せる場所はどこかと考えたときに私は中国だと思った。日本と中国が平和であることは、世界にとってもすごく大事なこと。侵略者の子としてハルビンに生まれた私に課せられた責任は、平和を約束し続けることだと思う」

「私の街」と呼ぶことをハルビンの人たちは許してくれたと思うか問うと、満面の笑みで「手ごたえはあります。私の街というより、私たちの街かしら」と一言。歌という天賦の才を武器に、加藤はこれからも平和のために歌い続ける。（市川礼子）

♪ Imagine there's no heaven
It's easy if you try
No hell below us
Above us only sky
Imagine all the people Living for today...

♪ Imagine there's no countries
It isn't hard to do
Nothing to kill or die for
And no religion too
Imagine all the people Living life in peace...

♪ You may say I'm dreamer
But I'm not the only one
I hope someday you'll join us
And the world will live as one

♪ Imagine no possessions
I wonder if you can
No need for greed or hunger
A brotherhood of man
Imagine all the people Sharing all the world...

♪ You may say I'm dreamer
But I'm not the only one
I hope someday you'll join us
And the world will be as one

（竹の台・タイガー）

[目次へ](#)

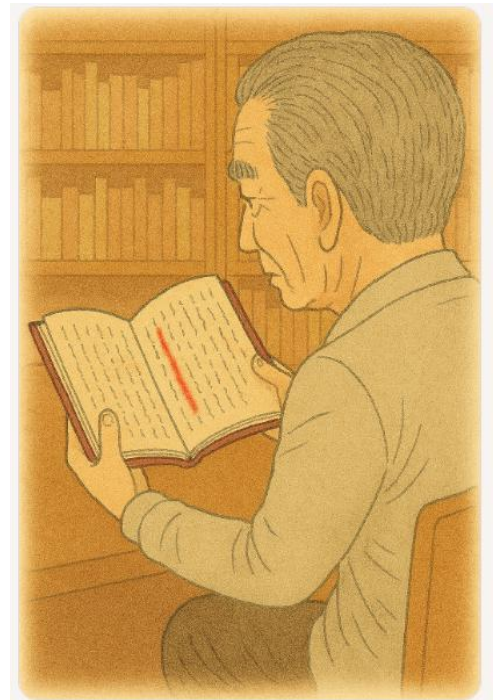
<ショート・ショート> ちょっとした気づきやつぶやき・・・

「赤い傍線」

図書館で借りた本を読んでいると、
ある頁に赤い傍線が引いてあった。

1989 年刊の古い岩波新書で、
著者には若い頃何度か
会ったことがあった。

傍線の本文は、
国鉄勤務の夫を亡くし、
3 人の子供を抱えながら
自身も国鉄に勤めていた妻が、
国労組合員が故に JR の採用を
拒否されたとき



「どう暮らしていけばいいんですか」

と叫ぶ一節が記されていた。

叫んだ妻と著者と読者を繋ぐ赤い傍線は、
血が滲んでいた。

(春日台・大西 No.14)

[目次へ](#)

< 西神の花 >

「ムクゲ」

西神 5 号線沿い、美賀多台 3 丁目バス停付近の歩道にて撮影。
ムクゲはフヨウの仲間で、沖縄の花ハイビスカスとも親戚とか。
夏から秋にかけて気長に咲き、目を楽しませてくれます。



(竹の台・島田 No.2)

[目次へ](#)